



忘れやすい身体

■ 菊川 裕也



最近物忘れが激しい。

何度も会ったことのある人でも名前が出てこなかったりする。久しぶりにイベントに出かけたら、菊川さん、と親しげに話しかけられた。何となく会ったことがあるような気もするけど、いつどこで会った誰なのかまったく思い出せない。非常に申し訳なく感じる。早くARグラスが発売されてその人の名前や履歴がオーバーレイで表示されるようになってほしい。

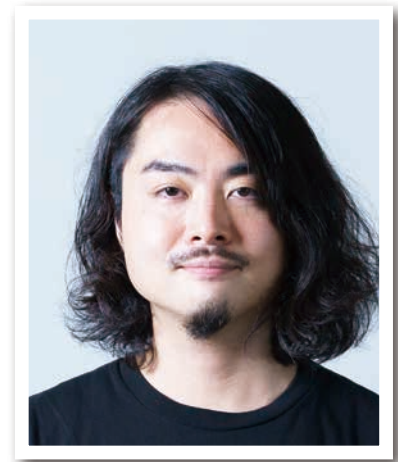
近頃はオンラインでしか会ったことのない相手と仕事をすることも多い。この間とあるプロジェクトの仲間と初めてオフラインで会って、画面上の顔と喋り方で勝手に小柄な人と思い込んでいたのだが、会ってみると思いのほか高身長で驚いた。

オンライン会議が一般化する中でバーチャル背景を使うことは当たり前になった。その一方で、アバターに変身したりフィルタで顔を変化させることに関しては現時点では日本の会議の場には適さないということになっている気がする。画像処理という観点ではほぼ同じ技術でも、人間社会に与える効果はまったく違うのが興味深い。

2021年11月の現在では猫も杓子もメタバースの話題でもちきりだ。今後はどうやらメタバース上で遊んだり仕事をするようになっていくようだ。メタバース上で仕事の会議をするとき、アバターは自分に似せていないといけないのだろうか？ 動物とかの姿で出席すると失礼に当たるだろうか？

■ 菊川 裕也
(株) ORPHE 代表取締役

一橋大学商学部を卒業後、首都大学東京大学院にて芸術工学を専攻。2014年よりスマートフットウェア「Orphe」の製品化をきっかけに(株)no new folk studio(現(株)ORPHE)を設立。



そもそもずっと同じ姿でいるのだろうか？ プラットフォームによって変える気もする。Aの仮想空間上では猫、Bの仮想空間上では寿司なクライアントとオフラインで会ったら意外と高身長だったとき、自分はちゃんと会釈できるだろうか？(現実で会った人すら覚えられないのに.....)。

仕事上の認知を得るためにはできるだけ統一の姿の方がいいかもしれない。考えてみると人の顔はほとんどの場合唯一無二で、誰でも身分証明として使うことのできる便利な存在だ。仮想空間であれば自分の身体性から解き放たれて自由な姿になれるが、一方で肉体が自動的に行う唯一性の証明を失うことになる。遊びであればどんなアバターが相手でもいいが、たとえば不動産の購入のような信頼が重要な場面であれば、本当の顔を知らない相手から買うのは怖い気がする。そうなるとう結局メタバース上でも元の顔からは逃れられないのだろうか？ もしくはこの感覚が古いだけで、ほかの方法で信頼を獲得していくようになるのだろうか？

センサ内蔵の靴で人の歩行をセンシングすることを仕事にしている。この数年、スポーツ科学への応用を行ってきたが、今後は医療へも応用していくつもりだ。歩くことと健康は相関が強いし、遠隔医療の必要性も高まる昨今、やりがいは感じる。

メタバースが発展しても、人は歩き続けるだろう。歩くことは楽しいし、仮にアバターが自由気ままに取り替え可能だったとしても、自分の身体は1つで取り替えがきかないのだから(今のところ)。